

# 『源氏物語』における「みるめ」表現

——明石の君を中心として——

大竹明香

## 一、はじめに

海辺を連想させる歌語に「海松布」がある。この「みるめ」は『源氏物語』作中においても用例が散見され、その用例数は全九例である。本稿では、『源氏物語』における「みるめ」の語の特徴について考えてみたい。

## 二、歌語「海松布」

歌語「海松布」は、そのほとんどが「見る目」との掛詞として用いられ、和歌においては「相手に会う機会」すなわち「逢瀬」の意を暗喩する表現として詠まれてきているものである。『古今和歌六帖』における「みるめ」が詠み込まれている和歌を見渡すと、「みるめ」と共に多く詠み込まれている語に「海人」があげられる。「みるめ」は「海人」が採るものだからである。この「みるめ」を採る意は、和歌においては「かる」や「かづく」の語が相

当する。歌語「海松布」は海人や浦、波などの語が縁語として用いられており、なかでも、海人が「みるめ」を刈ることから、「みるめ刈る」と詠まれている歌が散見される。「みるめ刈る」とは、「見る機会を得る」、多くは男性が女性に「逢う機会を得る」の意を表している。また相手に逢う意となる表現に「みるめおふ」という語がある。これが「逢い難い」の意となる場合は、「おひず」や「おひぬ」となる。同様の意としては「みるめなき」と詠まれている歌もある。

「みるめ」の語は、三代集においては、そのほとんどが「恋の部」に収められており、歌語「みるめ」の修辭法である「見る目」の意を掛けて詠まれていることを表しているといえる。

そして、「みるめ」が詠み込まれた和歌には、伊勢や近江の地名が共に詠み込まれているものがある。和歌において「伊勢」が「みるめかづく」など、「みるめ」を採る、すなわち「見る目を得る」ことができるとの意を含ませて詠まれているのに対し、「近江」の地名が詠み込まれている歌は「みるめ」に「なし」の語が付与され、「見る目を得られない」の意として詠まれていること

も、特徴の一つとしてあげられるだろう。

### 三、注釈書に見る「みるめ」表現の解釈

では、『古今和歌六帖』や三代集に採られた「海松布」が詠み込まれた和歌に見られる修辭法が、『源氏物語』においてはどのように影響し、その表現世界に作用しているのか。また、『源氏物語』の作中に独自に見られる表現があるのかについて考えた。

『源氏物語』作中における「海松布」については、紫の上に関係して多く用いられていることが、三村友希氏によって指摘されている。氏によれば、「海松布」は作中全九例が確認でき、全てが第一部に限定して用いられている。そして「みるめ」表現は紫の上を中心に、明石の君、明石の姫君などに関わって用いられている。くわえて、藤壺や朧月夜に関して用いられている場合は、光源氏の流離を意味付ける表現であり、これらは、紫の上と光源氏の関係性を中心として共鳴している。「みるめ」表現のほとんどの担い手は光源氏であると分析している。

ここでは、『源氏物語』における「みるめ」の用例の中から、若紫巻において語られている明石の君にまつわる叙述について考えてみたい。少し長いが、以下に引用する。

A 「さてそのむすめは」と問ひたまふ。「けしうはあらず、容貌心ばせなどはべるなり。代々の国の司など、用意ことにしめて、さる心ばへ見すなれど、さらにうけひかず。『わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりにこそあれ、

思ふさまことなり。もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りぬ」と、常に遺言しおきてはべるなる」と聞こゆれば、君もをかしと聞きたまふ。人々、「海竜王の后になるべきいつきむすめななり」、「心高き苦しや」とて笑ふ。

かく言ふは播磨守の子の、蔵人より今年かうぶり得たるなりけり。「いとすきたる者なれば、かの入道の遺言破りつべき心はあらんかし」、「さてたたずみ寄るならむ」と言ひあへり。「いで、なにしに。さいふとも田舎びたらむ。幼くよりさる所に生ひ出でて、古めいたる親にのみ従ひたらむは」「母こそゆゑあるべけれ。よき若人、童など、都のやむごとなき所どころより類にふれて尋ねとりて、まばゆくこそもてなすなれ」、「情なき人なりてゆかば、さて心やすくてしもえおきたらじをや」など言ふもあり。君、「何心ありて、海の底まで深く思ひ入らむ。底のみるめものむつかしう」などのたまひて、ただならず思したり。かやうにても、なべてならずもてひがみたること好みたまふ御心なれば、御耳とどまらむやと見たてまつる。

(若紫①二〇三—二〇五)

これは、作中における明石の君の初出の場面である。光源氏一八歳の春、北山を訪れた源氏は供人の良清から、播磨国にいる変わり者の父親とその娘の話を耳にする。父親は「代々の国の国司」から娘への求婚をことごとく断り、娘には、常日頃から自分の言っていることと違う結婚をするようならば、「海に入りぬ」と遺言までしているというのである。この話を聞いた源氏一行は「海竜王の后になるべきいつきむすめななり」、「心高き苦しや」とあり、

この父娘の話題は、笑い話として語られている。その後の会話は、「情なき人なりてゆかば、さて心やすくてもえおきたらじをや」つまり、いくらこの父と娘が国司の求婚を拒み通していても、傍若無人な人が国司となつて下つてきたならば、拒みきれないのではないかと、言い、この娘への求婚話が続いていく。ここまでの会話は全て源氏の供人たちのものであり、源氏は徹してこの話を聞いているだけなのである。しかし、それまで聞き役であつた源氏が発した言葉は、「何心ありて、海の底まで深く思ひ入らむ。底のみるめものむつかしう」である。この源氏の発話については、古注釈以来、さまざまに解釈がなされてきたようである。

「底のみるめ」については、『源氏釈』以来<sup>4</sup>、「あまのすむそのみるめもはつかしくいそにおひたるわかめをそつむ」を引歌とする指摘がある。ただしこの歌は『源註餘滴』に「此歌出所いまだ考へず」とあり<sup>5</sup>、出典未詳である。また『弄花抄』以来「本哥難用歎」と注されている<sup>6</sup>。『湖月抄』や『源註餘滴』は『河海抄』の注として、『後撰和歌集』四一七番歌・秋下・文室康康の「浪分けて見るよしも哉わたつみのその見るめも紅葉散るやと」の歌もあわせて引歌として指摘する<sup>8</sup>。『源註餘滴』は「按ずるにそのみるめとよめるは清正集に「すまのあまをしるへとおもへよわたつみのそのみるめはうたかひもなし」と加えている。一方、引歌ではないが、『萬水一露』は「何故かそのみるめもおふのうらにあふ事なしの名にはたつらん 定家爰の心詞を取て読給へり」と、定家の詠歌をあげて説明している<sup>9</sup>。以上のように、古注の流れのにおいて指摘がなされてきたのは、源氏の言葉にある、「底のみるめ」の語の出典を明らかにしようとするもので

ある。一方で、『岷江入楚』は「源也人々の色々に申すをおかしくおほして源の御（、給）詞也」また秘説は「すぐせたかは、海に入ねといひしこと也」とし<sup>10</sup>、『玉の小櫛』は「底の見る目も、きたなき所なるべきに、何とて海のそこまでは思ひ入て、海に身をなげよとはいふらんといふ意也、引歌無用」とする<sup>11</sup>。これらは引歌を用いる必要はなく、「底のみるめ」とは、本文の入道の言葉にある「もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」との娘への遺言にある言葉を言い換えているのだとの解釈である。

では、現代の注釈書においては、どのように解釈されているのだろうか。以下にみていく。

『大系』<sup>12</sup>は「入道は一体どんな気持で、娘に身投げせよとまで深く（真剣に）思いこんでいるのだろう。海の底へ行けば、娘は底に生えているみるめでも（何でも）何となしにむさ苦しく思うであろう。「底のみるめも、ものむつかしう」は、表は「海底に生えているみるめも、むさ苦しく思うであろう」であるが、同時に、入水せよなどという事は、世間の人が見ても大層うるさく（いやらしく）思うであろうの意を掛けて言った」とする。「みるめ（海松布）」と「見る目が掛けてある」とも説明する。また、『玉上評釈』<sup>13</sup>は「海に入りね」と「海竜王の后になるべき」の語から、「海の底まで」の語が出、それで「深く思ひ入る」ととなり、「底のみるめ」となる。海の底に生える、みるめ（海藻）と、人を見るめ（世間の思わく）とをかけ、そして、「ものむつかし」という「みるめ」の両義に続く語をもつてきた。海藻はくしゃくしゃしており、世の評判はうるさかろう、というのである」とし、

さらに『新全集』は「海の底」の縁語としての「海松布」と「見る目」との掛詞。身投げして海底に行けば、海底に生えている海松布もうつとうしいだろう、の意に、そんなに思いつめている娘では見聞きする感じもわずらわしく面倒だ、の意を重ねる、「集成」は「はた目もうつとうしい話だね。海の底の「海松布」に「見る目」を掛ける」とそれぞれ解している。現代の注釈書からは、「みるめ」の語に新たに「世間の目」の意を重ねて読みとる解釈、さらには、「底に生えている海松布もうつとうしいだろう」との解釈がなされている。しかしそこで疑問となるのは、なぜ「みるめ」に「世間の目」が掛けられていると解釈できるのであろうか、ということではなからうか。そのことを念頭に、「みるめ」の語意を問い直したいと思う。

そこで『新大系』の注をみてみると、以下のようにある。「源氏の言。どういふつもりがあつて、海の底深く（入水せよと）まるでどのように（深く）思いつめているのだろう。海底に見入られる娘では（わたし逢つてみるのも）何となく厄介で……。「みるめ」（海草の名）に男女の逢う意をかける。引歌があるう。「あまのすむ底のみる目もはづかしく磯におひたるわかめをぞつむ」を紫明抄は引く」と説明している。大意は『新大系』の説明でよいように思われる。源氏の言葉の直前まで、播磨の地にいる娘の求婚譚が供人たちの口から語られ、源氏は耳を傾けていた。この「底のみるめものむつかしう」は、「みるめ」に和歌の修辭法である「男女が逢う」意を掛け、源氏自身がそんな娘に逢つてみるのも、つまり「海の底での逢瀬などなんとなく気味が悪いなあ」との意と解釈するのが妥当である。

ではなぜ、「底のみるめものむつかしう」について、先のように古注釈以来、解釈に揺れがあるのだろうか。一つには、単に「みるめ」ではなく「底のみるめ」という表現であることによるであろう。「底の」という語は『岷江入楚』秘説が述べたとおり、すこし前にある「宿世違はば、海に入りぬ」との語や「海竜王の后になるべきいつきむすめなり」との語から導かれて「底の」と述べているのである。もう一つは、「底のみるめ」に「ものむつかしう」が付与されているという点からである。これは特に現代の注釈書において解釈に差異が見受けられる。歌語「みるめ」は管見に入る限り、「ものむつかし」などの暗さを表わす語を伴つて用いられていない語である。そのために「みるめ」を「世間の目」と解し「ものむつかしう」を「うるさい」や「うつとうしい」と訳しているのである。しかし、先述したとおり、この叙述は播磨の地に住む変わり者の父とその娘に関する求婚譚として語られているのである。この話を引き継いだ源氏の言葉であるから、やはり「みるめ」は「男女が逢う」意との掛詞として理解すべきである。「ものむつかしう」といいながらも、源氏はこの話に興味を抱いたようであると地の文は続ける。源氏はこのようなことでも興味を示す人なのだ、供人たちも思ったのだとある。やはり「みるめ」は「恋」の歌に多く詠まれているように「逢う機会」を表わしているのである。ところがその「みるめ」に付与されている語は「ものむつかし」という、「恋」とはかけ離れた、「暗さ」を持った語であった。

繰り返しになるが、この叙述が明石の君を語る叙述のはじめである。海辺に暮らし、都の源氏一行の噂話に上る明石の君にまつ

わる叙述に「みるめ」が用いられ、しかも「ものむつかしう」と続いている意味は何か、という問をたててみたい。そこには実態を伴った表現として明石の君を取り巻く表現世界が立ち現れてくるように思うのである。

#### 四、「源氏物語」における「みるめ」

明石の君の「みるめ」の用例の特徴を明確にするためには、たとえば、紫の上の用例を対比させることが有用であろう。次にあげるのは、同じ若紫巻における、紫の上に関する叙述である。

B 「何か、かうくり返し聞こえ知らする心のほどを、つつみたまふらむ。その言ふかひなき御ありさまの、あはれにゆかしうおぼえたまふも、契りことになむ心ながら思ひ知られる。なほ、人づてならで聞こえ知らせばや。

あしわかの浦にみるめはかたくともこは立ちながらかへる波かは

めざましからむ」とのたまへば、「げにこそいとかしこけれ」とて、

「寄る波の心も知らでわかの浦に玉藻なびかんほどぞ浮きたる

わりなきこと」と聞こゆるさまの馴れたるに、すこし罪ゆるされたまふ。「なぞ恋ひざらむ」とうち誦じたまへるを、身にしてみても若き人々思へり。

(若紫①二四一—二四二)

これは、源氏がまだ幼い紫の上に会わせてほしいと和歌に詠む場面である。「みるめ」が紫の上に「逢う機会」の意を表してお

り、「波」は源氏自身である。この源氏の歌に対する少納言の返歌には「みるめ」ではなく「玉藻」の語が用いられている。紫の上はまだ幼く「みるめ」の語は和歌において、大人の女君に対して用いる語である。したがって、紫の上に逢わせてほしいと訴える源氏に対して、「まだ幼いので」と断るには、「みるめ」の語は用いない方がよい。そこで、「玉藻」としたのである。

そして、ここでの表現の特徴は、歌の詠まれている場所である。紫の上や源氏は京の都に身を置いており、あくまでも想像の上で海辺の縁語である「みるめ」や「玉藻」の語を詠んでいるのである。

みるめなきわが身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆくくる (古今和歌集・六二三・恋歌三・小野小町)

これは『古今和歌集』に採られた小野小町の歌である。この歌は『古今和歌六帖』をはじめ、『伊勢物語』にも見受けられる歌であるが、詠者である小町が海辺近くに身を置いているというわけではなく、都において巧みに言葉を読み込んでいるのである。

紫の上に関する「みるめ」表現も同様に、都において詠まれている、いわば雅な言葉の世界の中にある。では一方の明石の君はどうであろうか。播磨国にいる、海辺近くにいる娘が「宿世違はば海に入りね」と言われているとあれば、それは決して雅な言葉の世界などではなく、実態を伴った表現として用いられているはずである。そのうえで「底のみるめものむつかしう」との源氏の発言は、後に須磨巻において再び語られる明石の君の造型を決定付ける表現でかたどられているといえる。この若紫巻の叙述以降、明石の君にまつわる叙述はどのように変わっていくのか、は

たまた変わらないうまま、「海辺」や「田舎」のような「雅さ」から離れた表現世界に据え置かれるのか。さらに詳しくみていく。さて、若紫巻において用いられている二つの「みるめ」の語は、その語が表出する背景をも違うことは明らかであるように思われる。紫の上に関して用いられる「みるめ」表現は「海辺」から離れた京の都における、源氏との関係性の中で用いられているようである。紅葉賀巻の以下の叙述をみてみよう。

C 愛敬こぼるるやうにて、おはしなながらとくも渡りたまはぬ、

なま恨めしかりければ、例ならず背きたまへるなるべし、端の方についで、「こちや」とのたまへどおどろかず、「入りぬる磯の」と口ずさみて口おほひしたまへるさま、いみじうされてうつくし。「あなにく。かかること口馴れたまひにけりな。みるめにあくは正なきことぞよ」とて、人召して、御琴とり寄せて弾かせてまつりたまふ。(紅葉賀①三三一)

これは、源氏が久方ぶりに二条院へ帰り、紫の上と対面した場面である。源氏と会えないでいた不満を含めて、紫の上が「入りぬる磯の」との古歌を口にした。それに対する源氏の返事は「みるめにあくは正なきことぞよ」つまり、「見飽きるのの良いことではない」との意で、前の紫の上の「入りぬる磯の」を受けて、海辺を連想させる「みるめ」の意を重ねているのである。これは、たとえば『新全集』の頭注において、『古今和歌集』六八三番の「伊勢の海人の朝な夕なに潜くてふみるめに人を飽くよしがな」歌を逆の意にとりなした表現であるとの説明がなされている。

ここにおける「みるめ」表現も、「海辺」とは何ら関係のない、都における雅ないわゆる「ことば遊び」の世界だといえよう。こ

こには若紫巻では幼かった紫の上が、その後の紅葉賀巻では、源氏にしばらく会わないうちに「入りぬる磯の」と古歌を口にするようになるまでに成長している様子が語られている。しかも、その古歌を口にした意は、源氏に会えないでいた不満を含んでおり、「みるめにあくは正なきことぞよ」と返した源氏にとって、少女から一人の女性へと成長しつつある紫の上の様子は、将来への明るさを見せていることになる。少女から大人の女性へ。紫の上は光源氏の愛育により、確実に成長している。続く葵巻の叙述には、「みるめ」ではなく「海松ぶさ」の語が用いられている。

D 「君の御髪は我削がむ」とて、「うたて、ところせうもあるかな。いかに生ひやらむとすらむ」と削ぎわづらひたまふ。

「いと長き人も、額髪はすこし短うぞあめるを、むげに後れたる筋のなきや、あまり情なからむ」とて、削ぎはてて、「千尋」と祝ひきこえたまふを、少納言、あはれにかたじけなしと見たてまつる。

はかりなき千尋の底の海松ぶさの生ひゆく末は我のみぞ見む

と聞こえたまへば、

千尋ともいかでか知らむさだめなく満ち干る潮ののどけからぬに

と物に書きつけておはするさま、らうらうじきものから若うをかしきを、めでたしと思す。(葵②二七—二八)

Dの「はかりなき」の源氏の歌は、紫の上のふさふさとした美しい髪を「海松ぶさ」に例えており、この歌は紫の上を独占したいとの意が詠まれている。若紫巻で源氏がまだ幼い紫の上を見出

した際、「髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして」(若紫①〇六)と語られていた紫の上の髪は、月日が経ち、美しく豊かに伸びていることがわかる。源氏は紫の上の髪を削ぎながら、紫の上の占有を詠ったのである。この場面が語られる葵巻は、源氏の正妻である葵の上の退場と、それに伴って、次の正妻候補として最有力であった六条御息所と源氏の、関係修復の不可能であることが語られる。紫の上は葵巻において、源氏の妻となるのである。

BCDの紫の上に関する叙述は、いずれの表現も「海松布」に「見る」の意を重ねたものであり、和歌の修辞法にみられる用法であるといえる。くわえて、これは「海辺」から離れた、実態を伴わない「雅さ」、そして源氏と紫の上の将来を想像させる「明らさ」をも有している表現であるといえる。

では、明石の君はどうであろうか。ここからは、さらに明石の君について踏み込んで考えてみたい。

その前に、源氏が須磨の地から都の朧月夜へ送った文について語る叙述をあげる。源氏の和歌には、都に身を置いていた頃とは違い、海原を目の前にして詠まれているであろうことが、感じられるのである。

E 尚侍の御もとに、例の中納言の君の私事のやうにて、中なるに、「つれづれと過ぎにし方の思ひたまへ出でらるるにつけても、

こりずまの浦のみるめのゆかしきを塩焼くあまやいかが思はむ」

さまざま書き尽したまふ言の葉思ひやるべし。

(須磨②一八九)

須磨の地の源氏から朧月夜へ送った和歌に「みるめ」の語が詠みこまれている。この歌は先に確認したように、「みるめ」に「見る目」を掛け、朧月夜への思いを詠んだ歌である。源氏が「みるめ」の語を歌に詠みこむことは、海辺である須磨の地で詠んだ歌であるからにはかならない。また諸注釈には「白波は立ち騒ぐともこりずまの浦のみるめは刈らむとぞ思ふ」(古今六帖・三・清原深養父)を本歌とするとの指摘がなされている<sup>17)</sup>。

須磨の地にいる源氏から都の朧月夜へ。須磨の地に身を置く源氏が和歌に「みるめ」の語を詠み込む時、そこには、若紫巻の明石の君にまつわる「みるめ」表現と同じように、実態を伴うものとして、源氏の置かれた状況が立ち現れてくる。かつて桐壺帝の最愛の皇子として、「光る君」と呼ばれた源氏は、今は流離の日々を須磨の地に送っている。「こんなにもうらさびれた」ともいえる源氏の姿である。それは、都における「雅やかなことば遊び」の世界ではなく、眼前に海の広がる実景を思い起こさせるものである。この須磨の地において源氏の詠む和歌には、「うきめ」、「海人」、「浦」など、海辺に関する語が多く詠み込まれている。「みるめ」もそのうちの一つであり、いつ都に戻ることに叶うのかもわからない、源氏の心模様をも想像させるような、実態を伴った海辺に関する歌語である。

F 「何ごとにつけても、

しほしほとまづぞ泣かるるかりそめのみるめは海人のすさびなれども」

とある御返り、何心なくうたげに書いて、はてに、「忍びかねたる御夢語につけても、思ひあはせらるること多かるを、

うらなくも思ひけるかな契りしを松より波は越えじものぞと」

おいらかなるものから、ただならずかすめたまへるを、いとあはれにうち置きがたく見たまひて、なごり久しう、忍びの旅寝もしたまはず。

(明石②二五九―二六〇)

Fは、明石の地にいる源氏から京の都で源氏の帰りを待つ紫の上への手紙の内容を語る叙述である。源氏の歌にある「かりそめのみるめ」とは、明石の君と結ばれたことを暗示している表現で、みるめは「見る目」との掛詞であり、海人は源氏自身を示している。これについて三村氏は「告白と釈明の和歌である。紫の上の返歌は、「松」に「待つ」を掛け、光源氏の裏切りに心を痛める心境を吐露している。紫の上は、光源氏の「みるめ」表現に対して恨む立場になっているのだ」と述べている。しかしここでは、若紫巻に続いて、再び明石の君が源氏から「みるめ」に重ねられて表現されていることを注視したい。この「しほしほと」の和歌を送られた相手は紫の上だが、源氏から「みるめ」の語を用いて暗喩されているのは明石の君である。ここでの「みるめ」表現に直接的に関わっているのは紫の上ではなく、むしろ明石の君だといえる。

この源氏の歌において明石の君は「かりそめのみるめ」と比喩され、明石の君を喩える「みるめ」が導く語は「海人のすさび」である。ここでは「海人」は源氏であるから、「すさび」とは、源氏の「かりそめ、慰み程度の」との意であり、これは直接明石の君の置かれた立場を表している。「みるめ」は「刈る」や「海人」を縁語とすることは確認した。しかし、「すさび」の語が付

与されている用例は、これもまた管見に入るかぎりない。すなわち、この語は明石の君の人物造型に関わって付与されている語であると考えられる。明石の君はこの時点では、自身が予想し、拒んでいたように、源氏が明石の地にいる間の「慰み程度」の人であることになる。海辺に身を置く源氏が詠んだ「みるめ」の歌に詠み込まれた「海人のすさび」は、Aの「みるめ」表現同様、その時の明石の君の置かれている状況を端的に表す語を伴って用いられているといえる。ここにおいても、明石の君にまつわる「みるめ」表現は、「将来への希望や明るさ」とはほど遠い、ある種の「暗さ」を有しているものである。

G 男君ならましかはかうしも御心にかけたまふまじきを、かたじけなういとほしう、わが御宿世もこの御事につけてぞかたほなりけり、と思さるる。御使出だし立てたまふ。「かならずその日違へずまかり着け」とのたまへば、五日に行き着きぬ。思しやることもありがたうめでたきさまにて、まめまめしき御とぶらひもあり。

「海松や時ぞともなきかげにゐて何のあやめもいかにわくらむ

心のあくがるまでなむ。なほかくてはえ過ぐすまじきを、思ひたちたまひね。さりともうしろめたきことは、よも」と書いてたまへり。

(滯漂②二九四―二九五)

これは、明石の姫君の五十日の祝いに際して、源氏から明石の地へ使いが送られる場面である。源氏から送られた和歌にある「海松や」とは、源氏と明石の君の間に誕生した、明石の姫君に関わる表現で、この「海松」については古注以来、海藻の「みる」

のことであるとの解釈と、「海辺に生える松」であるとの解釈、またその両説折衷案の解釈がある。なお、現代注では『集成』が「海松」（海藻の海松）を松にとりなし「時ぞともなき蔭」を言い出す」と、折衷案の立場をとっている。ここでは明石の浦の海辺に生えている松に「海松」が掛けられており、「時ぞともなきかげに」いるのが姫君であると解する。つまり、姫君は「海松」に喩えられてはいないということである。姫君が「かげ」に居るその理由は、都から遠く離れた明石の地で誕生したからであり、姫君の「かげ」になっている「海松」とは、あえていえば、明石の君のことを示している歌であらう。

ところで、Gの歌について三村友希氏は次のように述べている。<sup>19)</sup>  
物語全体の「みるめ」表現の蓄積からしても、明石の君を生母、紫の上を養母として、光源氏の栄華を確実にする明石の姫君その人が「海松」にたとえられることに意義がある。この「うみまつ」は、「みるめ」の用例の中でも、その性質を象徴的に示す一例であると思う。

この三村氏の論には従いかねる部分がある。わが子である明石の姫君の五十日を祝う源氏から姫君の母である明石の君への贈答歌の意に、紫の上を結びつけて解釈するのは、少し無理があると思われる。

三村氏は紫の上が「松」を詠んでいるからとの論拠を示しているが、その歌は、Fに引用した「うらなくも」の歌であり、ここでの叙述においては、関係がないのではないかと考えられる。つまりは、紫の上をとりまく表現から切り離して考えるべきである。氏の論旨は、「みるめ」表現は作中において、紫の上に関わ

る歌を中心に連鎖しており、明石の君や朧月夜、藤壺の詠歌を含め、「互いに共鳴して連鎖していた」とする。先に引用したGの歌に関する氏の解釈も、この論旨にもとづくものだと考えられる。しかし、ここで注視したいのは、「みるめ」表現は、それぞれが共鳴してはいないのではないかとということである。ここでは先述したように、海辺に暮らす明石の君が、ここでもまた、海藻の「みる」に喩えられることに注視し、明石の君をとりまく表現の特徴を見出せるのではないかと考える。海沿いに生える松や海の底に生えている海松が明石の君であり、その蔭に姫君はいるのだという。姫君出生を喜ぶ源氏の歌にあって、明石の君の存在は姫君の蔭に繋がるものであると詠まれているのである。

そして、このGの歌でも「みる」には「かげ」という「暗さ」を有した語が付与されている。姫君は田舎で生まれ、身分の低い母明石の君の「かげ」にいるのだという。これから姫君が克服しなければならない生みの母の身分の低さという問題を暗示しているのが、ここでの「かげ」の語であるといえる。

H 「ひとりゐて嘆きしよりは海人のすむかたをかくてぞ見  
るべかりける

おほつかなさは、慰みなましものを」とのたまふ。いとあは  
れと思して、

うきめ見しそのをりよりも今日はまた過ぎにしかたにか  
へる涙か

中宮ばかりには見せたてまつるべきものなり。かたはなるま  
じき一帖づつ、さすがに浦々のありさまさやかに見えたるを  
選りたまふついでにも、かの明石の家居ぞ、まづいかにと思

しやらぬ時の間なき。

(総合②三七八)

ここでは、紫の上の詠んだ歌にある「見る」が「海松」との掛詞となつている。源氏の流離の際、自分は源氏の側にいなかったことを嘆く意であり、ここでの源氏と紫の上との贈答歌は、源氏の流離を回想して詠まれたものである。したがって、源氏はもはや帰京し、海辺に身を置いてはいない。BCD同様に海辺から離れた場において詠まれており、かつての苦しみの日々も、もはや過ぎ去つたことであるとの確認である。この贈答歌において源氏は紫の上に対して「いとあはれと思して」と感じて返歌を詠んでおり、二人の絆の深まったことを語る叙述である。しかし一方で、源氏の詠歌のすぐ後には「中宮ばかりには見せたてまつるべきものなり」と、源氏の藤壺に対する思いへと語りが移行している。これは、紫の上の詠歌において「見る(海松)べかりける」とあるのに対し、源氏の和歌においては、「うきめ見しそのをり」とあり、二つは呼応している表現であるが、源氏にとつての「うきめ見し」その流離の意味する所は、藤壺のみが知り得ることであるからであろう。くわえて、「かの明石の家居ぞ」と、明石の地にいる明石の君と姫君への思いも語られている。源氏の須磨・明石流離は、紫の上との対話だけに留まらず、藤壺と明石の君という、源氏の子の母である、二人の女君への心情へと流れていくのである。

I 「兵衛の大君の心高さはげに棄てがたけれど、在五中將の名をばえ朽さじ」とのたまはせて、宮、

見るめこそうらふりぬらめ年へにし伊勢をの海人の名をや沈めむ

かやうの女言にて乱りがはしく争ふに、一卷に言の葉を尺くしてえも言ひやらす。  
(総合②三八二)

これは、宮中での総合の際に、藤壺の宮が『伊勢物語』の絵を評価した叙述である。藤壺の宮の歌に「みるめ」の語が詠みこまれている。この歌は諸注釈が指摘するように、在原業平の流離と光源氏の流離を重ねている歌である。また、この歌には「伊勢」の語が詠み込まれているが、「みるめ」と「伊勢」は縁語であるため、三村氏の、Eの歌と共にこの歌が源氏の流離を意味づけるものだとする指摘には、やはり従いかねる。

また、「伊勢をの海人の名をや沈めむ」と藤壺の言う『伊勢物語』の「みるめ」の用例は、二十五段、七十段、七十五段、八十七段において確認できる。そのうち、七十段と七十五段が「伊勢」の地に関わるものである。藤壺の歌は業平が「海人」となる、つまり源氏と同様に海辺に身を置いた、流離の日々を表しているのであろう。源氏の流離の意味する所の核心については、源氏その他には藤壺のみが知り得ることである。Hの叙述において源氏の心情が藤壺へと移行していったことと、対応しているのかもしれない。ともあれ、この藤壺の詠歌をもって『源氏物語』の「みるめ」表現は見受けられなくなるのである。明石の君の比喩ではじまつた「みるめ」表現は、藤壺の詠歌において閉じられることになる。

## 五、明石の君と歌語「みるめ」

ふたたび、話を明石の君に関する「みるめ」表現に戻そう。

先にあげたFの歌については、本橋裕美氏の論文においてその

和歌が詠まれた背景についての新たな読みの可能性が論じられている<sup>21</sup>。重要な指摘であるため、以下に本橋氏の論旨をまとめる。

明石巻において光源氏をはじめ明石の君と逢った際、光源氏が明石の君に対して感じ取った六条御息所の「けはひ」については、先行研究においてさまざまに論じられてきた。本橋氏の論は、六条御息所と明石の君の共通性を、徽子女王を媒介としながら、捉えなおすものである。

氏の論の重要な柱として、『万葉集』所載の麻統王関連歌群があげられている。これは、光源氏と六条御息所との贈答歌に「伊勢島」の語があることに注目しているためである。

うきめ刈る伊勢をの海人の思ひやれもしほたるてふ須磨の浦にて

よろづに思ひたまへ乱るる世のありさまも、なほいかになりはつべきにか」と多かり。

伊勢島や潮干の潟にあさりてもいふかひなきはわが身なりけり

(中略)

伊勢人の波の上こぐ小舟にもうきめは刈らて乗らましものを

海人がつむ嘆きの中にしほたれていつまで須磨の浦にながめむ

(須磨②一九四―一九五)

六条御息所が自身のいる陸続きである伊勢の地を「伊勢島」と詠んでいることに対する違和感を指摘し、麻統王伝承が影響を与えている可能性を想定する。それは、「島」は「咎人」が流される地であり、光源氏と六条御息所は共に「それぞれ問われない罪

を内心に抱えて」いることを指摘する。

さらに氏は、明石の君について次のようにいう。すなわち、六条御息所と明石の君には徽子女王からの影響が共にみられるのである。くわえて明石の君の役割は、桐壺院と明石の入道と共に「海人」として須磨の地にさすらい続ける光源氏を導き、帰京の道筋を作った人であり、また「鄙の地には不似合いな光源氏像を復活させることであつた」と述べている。

しほしほとまづぞ泣かるるかりそめのみるめは海人のすさびなれども

先にあげた光源氏から紫の上への歌である。この歌での「海人」が、光源氏自身が「海人」となつていつまでも須磨の地をさすらつていくことを規定していると本橋氏はいう。とすれば、この歌では「みるめ」に喩えられている明石の君を刈る、すなわち「明石の君を手に入れる光源氏の行動は既に「海人のすさび」であり」自身を卑下し「海人」として認識する明石の君の前で、光源氏は流離する人から明石の浦の賓客へと変身を遂げるのである」と述べるのである。つまり、光源氏が同じ「海人」の語を詠み込んでいるそれぞれの歌の意は大きく異なつており、物語の構造において、六条御息所が光源氏を「海人」とするとき、そこには「帰還不可能の物語」あるいは「伊勢物語」のような「体制への反逆の物語」へと光源氏を誘うものを表出し、一方で六条御息所とともに徽子女王を取り込んでいる明石の君の存在が、光源氏を帰京へと導くのだとする。

この指摘は、これまで「しほしほと」の歌が紫の上への釈明、方便の歌であるとの把握がなされてきた解釈に対し、先にあげた

光源氏が詠んだ二首にある「海人」の語を対照的な意味と捉え、物語に底流している六条御息所の存在を呼び起こし、明石巻における明石の君の担う役割を定義づけるものとして捉えなおすものである。その意味でこれは大変興味深い論である。

ただ、物語における「みるめ」表現の用例として見るとき、やはり「すさび」の語が付与されている明石の君の表現世界の構造にも注視すべきであろう。「すさび」とはたとえば「手すさび」などの語があるように、やはり明石の君であるからこそ付与されていると考えられる。流滴の身であるとはいえ、源氏は都から来た高貴人であり、明石の君はこの時点では、源氏が明石の地にいる間の相手にすぎず、仮に源氏が帰京することになっても、明石の地に捨て置かれる可能性がある。「すさび」の語は、明石の君が有している、光源氏との階級差や関係性を端的に表す語なのではないだろうか。このような語が「みるめ」と縁語である「海人」の語に付与されている時、明石の君の役割は本橋氏の指摘とは違う、「暗さ」をも内包しているともみられるのではないだろうか。

くわえて、本橋氏の重要な指摘である、六条御息所は和歌の表現によって「戻れない光源氏」を描くことになろう<sup>1</sup>。そして明石の君は「帰還し得ない咎人としての光源氏を開放するのである」との論旨は、「みるめ」の語を媒介として、また別の角度から補強することが可能かと思われる。

たとえば本橋氏がある、須磨巻における光源氏と六条御息所との贈答歌に、「伊勢」の地名と共に「うきめ」が詠み込まれている。「うきめ」とは海藻の名であるが、「憂き目」との掛詞として詠み込まれている。「うきめ」の語は『源氏物語』作中において

ては他に二例ほど確認できる。先にとりあげた絵合巻の日の用例と、葵巻において出産に際して思わしくない葵の上に対して、「あなみじ。心憂きめを見させたまふかな」(葵②三九)と源氏が述べているものである。ただし、葵巻の用例は、海藻の「うき布」との掛詞の意で用いられているものではない。この葵巻の用例をも含め、『源氏物語』作中の「うきめ」の語の発話主体は、すべて源氏である。

また、『伊勢物語』八十七段と『大和物語』七十九段にそれぞれ一例ずつ「浮き海松」の語が確認できる。『伊勢物語』には「つとめて、その家の女の子どもいでて、浮き海松の浪に寄せられたるひろひて、家の内にもて来ぬ」とあり、「憂し」の意が掛けられてはいないものである。しかし、『大和物語』七十九段「須磨の浦」には、以下のようにある。<sup>2</sup>

また、おなじ親王に、おなじ女、

こりずまの浦にかづかむうきみるは浪さわがしくありこ  
そはせめ

『新全集』の頭注には「「うきみる」は「浮き海松」と「憂き見る」の掛詞」とあり、ここでは、「浮き海松」に「憂き見る」の意を込めていることが確認できる。このように、先行作品において「みるめ」に「うき」の語が付与されて用いられていることが確認できるのであるが、一方で『源氏物語』の「みるめ」表現においては確認できないのである。

先に確認したように、歌語「みるめ」は「伊勢」の語が縁語として用いられている歌が多数ある。同じ須磨巻におけるEの場面で、源氏が直接的に流離のきつかけとなった朧月夜に贈った和歌

には「みるめ」の語が用いられており、同様に須磨の浦に身を置く源氏と六条御息所との贈答歌においても、「みるめ」の語が用いられていても不思議ではない。光源氏と六条御息所との贈答歌においては伊勢の地と縁語である「みるめ」ではなく、意識的に同じ海辺に関する歌語である「うきめ」の語が選ばれていると指摘できるのではないだろうか。つまり「見る」の意を含む「海松」の語は用いなかったのであり、それに対して明石の君は光源氏の和歌において「女に逢う」意を表す「みるめ」に暗喩された。「うきめ」と「みるめ」は六条御息所と明石の君の対照的な立ち位置を示し、本橋氏の指摘を補強しうる表現であると考えられる。

## 六、まとめ

これまで『源氏物語』における「みるめ」表現を、それぞれAからIまでを考察した。これらは、大まかに明石の君に関わるA F G、紫の上に関わるB C D Hと、朧月夜に関するE、藤壺の詠歌であるIに分類することができる。歌語「みるめ」は、作中においては個々にその表出される世界を有している。三村氏は作中において「みるめ」表現はそれぞれが共鳴していると述べている。しかし「みるめ」表現が源氏と紫の上の関係性を中心に共鳴しているわけではない。ただ、一部においては関係性の見られるものもある。B C Dの紫の上に関する「みるめ」の語が用いられている叙述と、A F Gの明石の君に関する「みるめ」の語が用いられている叙述についてである。

B C Dの新枕以前の紫の上に関する「みるめ」の語が用いられている叙述が、光源氏と紫の上の将来の夫婦関係を想像させる「明るさ」を内包した表現だとすれば、A F Gの明石の君にまつわる叙述における「みるめ」は「ものむつかしう」や「海人のすさび」、「かげ」などの語を伴っている。紫の上の「みるめ」表現は三代集に見られる修辞法によって支えられているとするならば、明石の君のそれは、三代集とは異質である。これらは明石の君に関する表現としての特徴を表わしているといえ、いわば「陰と陽」、紫の上と明石の君に関する「みるめ」の語は、対照的な用いられ方がなされているのではないだろうか。

紫の上に関して用いられた「みるめ」の語は、その用法が「見る」を重ねた一般的な用法に支えられているとみられた。それに対して、明石の君に関して用いられた「みるめ」の語は、やはり「見る」を重ねているものもあるが、「みるめ」の語に導かれて付与されている語は、「ものむつかしう」や「海人のすさび」、「かげ」などの、三代集に採られた和歌には確認できない、独自の表現世界の構造が浮かびあがってくるのではないだろうか。これらの語は、明石の君を語る叙述における特徴の一つである、「数ならぬ身」や「身のほど」、「高し」の語と照らし合わせて考えられる表現でもあるのだと思う。また、「みるめ刈る」が「相手に逢う機会を得る」の意であるのに対し、Fの和歌において源氏が詠んだ「かりそめのみるめ」は一人寝のなぐさめの相手であるとの意を暗示しているが、このような表現も、和歌の用法には見られない『源氏物語』独自の表現方法であるといえるのかもしれない。

『源氏物語』の「みるめ」表現は絵合巻をもって見受けられなくなる。その意味は何か。一つには源氏の須磨・明石への流離が、絵合巻をもって一応の収束を見るからであろう。詳しくは今後の課題としたい。

注

- (1) 歌語「みるめ」の用例は、『古今和歌六帖』及び三代集を調査範囲とした。本稿では、紙幅の都合上、用例及び詳細な分析をあげなかった。歌語「みるめ」の用例についての詳細は、稿を改めて提示したい。
- (2) 三村友希「源氏物語」「みるめ」表現考―紫の上物語を中心に―(『日本文学』第六〇巻第三号 二〇一一年三月)。
- (3) 以下「源氏物語」本文は、『新編日本古典文学全集』(小学館、一九九八年)から引用した。○内は巻名・巻数・頁を示している。
- (4) 渋谷栄一編『源氏釈 源氏物語古注集成第一六巻』(おうふう、二〇〇〇年) 五二・五三頁。
- (5) 市島謙吉編『源註餘滴』(國書刊行會、一九〇六年) 一十四頁。
- (6) 井伊春樹編『弄花抄 源氏物語古注集成第二四巻』(桜楓社、一九八八年) 三四頁。
- (7) 『源氏物語湖月抄(上)』(講談社学術文庫、一九八二年) 二四五頁。
- (8) 玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』(角川書店、一九六八年) 底本「文禄本」にはない。
- (9) 井伊春樹編『萬水一露 源氏物語古注集成第八巻』(桜楓社、一九八三年) 二一八頁。
- (10) 中田武司編『岷江入楚 源氏物語古注集成第一二巻』(桜楓社、一九八〇年) 三二九頁。
- (11) 『本居宣長全集第四巻』(筑摩書房、一九六九年) 三八六頁。
- (12) 『日本文学大系①』(岩波書店、一九五八年) 一八三頁。
- (13) 玉上琢彌『源氏物語評釈第二巻』(角川書店、一九六五年) 四〇頁。
- (14) 『新潮日本古典集成①』(新潮社、一九七六年) 一八八頁。
- (15) 『新日本古典文学大系①』(岩波書店、一九九三年) 一五六頁。
- (16) 『古今和歌集』の表記は『新日本古典文学大系』(小学館、一九八九年)に拠った。
- (17) 引用は、『新編国歌大観 巻二』(角川書店、一九八四年)に拠った。
- (18) 前掲注2三村論文。
- (19) 前掲注2三村論文。
- (20) 『新編日本古典文学全集』(小学館、一九四四年)。
- (21) 本橋裕美「光源氏の流離と伊勢空間―六条御息所と明石の君を中心に―」(『源氏物語煌めく言葉の世界』翰林書房、二〇一四年)。
- (22) 引用は、前掲注20に同じ。(おおたけあかり 大学院博士後期課程在学生在)